潜在的カリキュラムとしての英語教育センター
― 英語教育センター利用生徒の追跡調査を通して ―

樟蔭学園　英語教育センター
コーディネーター　山岡賢三

1. はじめに

学校の教師によって意図的に組織され計画された知識や経験の体系は顕在的カリキュラム，それ以外のもので生徒たちの学習を規定するものの体系が潜在的カリキュラムと呼ばれている[(1)]。例えば，教室に並べられていた学級文庫の本をたまたま休み時間に読み，その本に刺激され，学習意欲を大いに喚起したケースが潜在的カリキュラムのよい例である。学校の中では，顕在的カリキュラムよりも潜在的カリキュラムを通して偶発的に学習したことの方が結果的にみて生徒の人間的成長にとって大きな意味を持っている場合がある。この「結果」レベルから見るカリキュラム社会学者や一部の教育心理学者によってなされた，「潜在的カリキュラム hidden curriculum」の重要性の指摘は，新しいカリキュラムの研究の分野を開いたものとして極めて重要である[(2)]。

英語教育センター（以下 ELTC）には様々な英語関係の図書や教材があり，自学自習ができるパソコンブースがある。放課後にはネイティブが常駐していつでも英会話ができる。生徒たちが自主的に，または偶発的に学習意欲を喚起し，自らの英語力を向上させることができる施設である。そういう意味では，ELTC には潜在的カリキュラムの要素が多く含まれている。しかし，このような施設も学生・生徒に活用されなければ何の価値もない。

ここでは，ELTC の設備をよく活用し，英会話やイベントなどに頻繁に参加した５名の生徒を研究対象とし，それらの生徒がどのように学習意欲を喚起し，自らの英語能力を伸ばしていったのか，潜在的カリキュラムとしての ELTC の重要性を意識しながら述べたい。

2. 研究対象生徒

研究対象生徒は樟蔭高等学校児童教育コース２年春組（平成２４年度）の

５名の生徒である。児童教育コースは平成２３年度「英語が使える小学校・幼稚園教諭，保育士をめざすこと」を目的に設置された。幼稚園実習や保母検定習得のための授業はもちろん，実践的な英語を身につけるため，English Camp や英会話の授業なども意識的にカリキュラムに組み込まれている。平成２３年８月８日～１０日，児童教育コース第一期生は「小豆島あずき王国英語村」に初めて参加し，英語ネイティブによるレッスン，留学生や幼稚園児との交流を通して，英語を使って楽しむことができた。事後のアンケートによれば，ほとんどの生徒が「もっと英語を話せるようになりたい」という思いを持った。この研究対象となった生徒も同様に，この English Camp が英語を好きになるきっかけとなったことは言うまでもない。

その中の生徒 A は東大阪菊水ライオンズクラブより推薦を受け，平成２４年度海外派遣ユース候補に選ばれた。派遣ユース候補には英語テストが課せられているので，A は平成２３年９月中旬頃から頻繁に ELTC に来るようになった。A は公立中学校から進学した生徒で，英語に関しては中学校の授業だけで，特別なトレーニングも受けていなかった。平成２３年９月最初に ELTC に来た日に，英検３級のテストをさせたところ，筆記テストは７割くらい取れていたが，リスニングテストでは３０問中９問しか正解できなかった。特にリスニング力が弱く，英語音読もカタカナのふりがなを読むような音読しかできなかった。

他の生徒 B,C,D,E は英語に興味を持ちながらも，きっかけがなく，なかなか ELTC に来ることができなかったが，A の誘いもあり，１１月頃からも自発的に ELTC に現れるようになった。ELTC に来た最初の日，B,C,D,E も同様に英検３級のテストをさせた。B は筆記が比較的できてもリスニングが弱かった。逆に，C と D はリスニングが比較的できていたが，語彙力がなく，文法もわかっていなかった。E はバランスよく得点することができた。それぞれ違いはあったが，誰もが３級の合格ライン６割を取ることができなかった。

3. 活動内容

3.1 英検学習

ELTC には英検や TOEIC など英語資格テスト対策教材が揃っている。多数の学生や生徒がこれらの教材を利用している。対象となった生徒にも目標

を持たせるため，英検学習を勧めた。それぞれの生徒にあった学習のやり方や学習内容のポイントを指導したが，あくまでも自ら自主的に学習するように仕向けた。リスニング問題をする日，筆記問題をする日と自分たちで計画し，採点や間違いなおしも解説を見ながら自分たちで学習した。

Aの弱点はリスニングであることがわかっていたので，リスニングのポイントを教え，数多くのリスニング問題を解くよう勧めた。Aは学習を始め一ヶ月半の間に英検３級の過去問題をやり終え，最後にはリスニングも含め，９割の得点を取れるようになった。続いて準２級の学習に取り掛かり，ELTCに来るようになって４ヶ月目には準２級に合格した。

Bには主にリスニング教材を与え，CとDには筆記テストの問題を解かせ，間違った箇所や覚えていない語彙を覚えるよう指示した。そのような学習を進めているうちに，B,C,D,EもELTCに来るようになって４ヶ月目には３級の過去問題を８割前後とれるまで英語力を伸ばした。

3.2 音読

ELTCには音読やシャドーイングに関する教材を豊富に揃えている。その中で，対象生徒には，「英会話・ぜったい音読」（講談社，國弘正雄編著）を勧めたところ，ELTCに来れば，毎回１０～２０分ほどCDを聞きながらシャドーイングすることが日課となった。また，各自のウォークマンに教材を録音し，自宅や登下校でもトレーニングした。このトレーニングが対象生徒の英語らしく音読する力やリスニング力を飛躍的に伸ばした。

3.3 ネイティブとのフリートークと映画鑑賞

ELTCでは月曜日から金曜日まで放課後ネイティブスピーカーを常駐させ，学生や生徒が自由に英会話できる環境を整えている。対象の生徒もELTCに来れば，前半は英検や音読で自主学習をしたあと，後半少なくとも３０分は英会話をした。また，映画の好きな生徒はDVDを鑑賞した。緊張した学習の後にはリラックスしながら，英語学習ができるように自分たちで工夫していた。

3.4 ELTCイベントへの参加

対象生徒はELTCで催されるクリスマス会，ハロウィーンパーティ，バレ

ンタインパーティ，留学生との交流会などにも積極的に参加し，英語を実践的に使うだけではなく，異文化にも興味を持つようになった。

4. GTEC スコアによる成績比較と分析

対象生徒の第２０回(H23.11.24)，第２１回(H24.6.15)の GTEC(Benesse Corporation による英語力を絶対評価で測るテスト）のスコアを比較し，ELTC という潜在的カリキュラムでの学習がいかに効果があったかを分析する。

表1

生徒	第20回(H23.11.24実施,184名受験)				第21回(H24.6.15実施,250名受験)				伸び
	Total	Reading	Listening	Writing	Total	Reading	Listening	Writing	(21回-20回)
A	420	170	150	100	579	243	215	121	159(1位)
B	291	86	115	90	429	156	158	112	135(2位)
C	261	72	89	100	357	127	114	116	96(9位)
D	294	100	94	100	363	130	117	116	69
E	318	120	111	87	381	124	156	101	63

表１を見ると，第２１回 GTEC テストでは，樟蔭高校２年生の GTEC(Basic) を受験した２５０名の中で生徒Ａは伸びが１位であったことがわかる。また，特筆すべき点は，対象生徒５名のうち３名が伸び率１０位の中に入っているということである。他の２名も６０点以上も得点を伸ばしている。特にリスニングではどの生徒も著しい伸びが見られる。

どの生徒もリスニング力を伸ばした理由としては，音読トレーニングを毎回自主的に取り組んだことが考えられる。CD のネイティブスピーカーの音読に合わせて，シャドウイングやリピート＆ルックアップの練習を繰り返すことによって，リズムやイントネーションを頭や体に刻みながら，自然なネイティブの英語の音を多少なりとも身につけたようだ。つまり，「口に出せる英語は聞き取れる」ということを体得したと考えられる。また，英検の過去問でリスニングを集中して聞き取るトレーニングをしたことも大きな要因である。

ネイティブとのフリートークで，自分の持っている英語力を駆使して，何かを説明したり，自分の意見を述べたりする経験を通して，ライティングで

は多少の間違いを恐れず，英語で表現しようという意欲が出てきたと考えられる。

5. 潜在的カリキュラムとしてのELTCの利用

平成２３年度１年間のELTC利用者数は３，１８７名であった。前年度の平成２２年度の２，６４２名と比べて，５００名以上の利用者が増えている。平成２４年度はさらに１，０００名以上の増加が見込まれている。利用者が増加している原因として考えられるのは，①ELTCが施設としてオープンしてから３年目を向かえ，学生・生徒，または教師の中で認知度が深まったこと，②施設や教育内容が充実したこと，②海外研修やEnglish Campなどの学校行事に結びつけてELTCを利用したこと，それに加え，③授業中にELTCの施設を使わなければできないような課題を出したことが考えられる。授業で課題を与えられてELTCに来た生徒を，ネイティブとのフリートークや英語教材，DVD，留学雑誌，外国文化紹介イベントなどに興味を持たせ，自主的な英語学習に導くことである。つまり，教師が意識して，授業や学校行事という顕在的カリキュラムからELTCという潜在的カリキュラムに，生徒の目を向けさせることが肝要である。

6. まとめ

文科省は潜在的カリキュラムの例として，「『いじめ』を許さない態度を身に付けるためには，『いじめはよくない』という知的理解だけでは不十分である。実際に，「いじめ」を許さない雰囲気が浸透する学校・学級で生活することを通じて，児童生徒ははじめて『いじめ』を許さない人権感覚を身に付けることができるのである。だからこそ，教職員一体となっての組織づくり，場の雰囲気づくりが重要である[(3)]」と述べている。つまり，ELTCが有意義な潜在的カリキュラムになりうるには，教職員が一体となって，ELTCでの学習に学生・生徒を誘導し，教職員自らがELTCを利用し，ELTCの場の雰囲気づくりに率先して協力しなければならない。そうでなければ，ELTCにいくら立派な機器や教材が揃っていても，「仏つくって魂入れず」になってしまう。

オープンキャンパスやオープンスクールでのELTCの紹介，児童教育コース英語合宿や海外研修の事前研修，英語クラブ部員のELTC行事への参加，

英語教員指導力向上研修会の参加，異文化理解と英語運用能力向上のための English Salon への教職員の参加など，徐々にではあるが，中高の教職員を中心にその輪は広がっている。

対象となった生徒も，このような流れの中で，担任や英語科教員による勧めや励ましがあり，英語学習に目覚め，ELTC を大いに利用し，英語における自己達成を成し遂げたのである。

［注］

(1) 新井郁男「教育経営論」放送大学大学院 2002 年

(2) 安彦忠彦「教育課程編成論」放送大学大学院 2002 年

(3) 文部科学省「人権教育の指導方法等の在り方について［第二次とりまとめ］」